

もう一度ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

夜桜 楓

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、物語の英雄に憧れた少年が英雄になるまでの物語では無い
これは、一人の英雄が少年に戻り出会いを求める物語

目次

プロローグ：夢の終わりと夢の始まり	1
第1話：女神との再開	6

プロローグ：夢の終わりと夢の始まり

かつて一人の少年は物語の英雄に憧れ、自らも物語の英雄のようになるためにそして、ダンジョンで可愛い女の子と出会うために迷宮都市オラリオにやって来た。

そして、少年はダンジョンで多くの仲間たち、憧憬に出会い、数多くの苦難を乗り越え英雄と呼ばれるまでになった。

ダンジョンを最下層まで攻略した英雄

前人未到のレベル9にたった一人上り詰めた英雄

黒龍を討伐した英雄

その数多くの少年の功績に多くの人々、そして神々は驚嘆した。

そんな、英雄も人の子

神の恩恵を授かっていても寿命という壁は越えられない

英雄の名はベル・クラネル

多くの英雄譚を残したベル・クラネルは自らの死期を悟り、かつて彼が団長を努めるファミリア、ヘスティアファミリアのホームであった教会の跡地に来ていた。

今は教会の祭壇のみが残されており、ベルはその祭壇に腰を下ろす。

「ベル君、どうしたんだいこんなところに来て」

そこで、ベルに声をかける神物が現れる。

「神様、神様こそどうしてここに？」

その神物はかつて英雄に憧れていた少年に恩恵を授け、少年だった英雄が所属するファミリアの主神

神ヘスティア

ヘスティアはベルの横に腰を下ろす

「君がホームから出ていくのが見えてね、身体の調子は大丈夫なのか

い？」

「はい、今日は少し良いのでなんだか、ここに来ないといけない気がするので」

「そうか、だが懐かしいね、ここに居ると僕が君と出会った頃のことを思い出す。まるで昨日のようにね」

「それは、僕もですよ。色んなファミリアから入団を断られていた僕を神様に見つけて頂いて家族にしてもらいました。今の僕が居るのは、神様のおかげです」

「よせやい、今の君が居るのは君の努力の賜物だよ。それに、感謝するのは、僕の方だよ。一人ぼっちだった、僕の家族になつてくれてありがとう」

かつてのホームの跡地で行われる神と英雄の会話は、まるで別れを告げる会話のようだった。

「神様、少し眠くなって来ました・・・」

「そうか・・・なら特別に僕の膝を貸して上げよう！」

ヘステイアがそう言うのとベルは迷いなくヘステイアの膝の上に頭を乗せる。

かつての少年だった頃の彼なら顔を赤くして慌てていただろう。

「なあ、ベル君、君はかつて僕に言ったねダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？とどうだい、答えは見つけられたかい？君は少し先に天界で待っていておくれよ、僕はもう少しこちらに残らないといけないからさ、必ず君を見つけてもう一度言うんだ・・・僕の家族にならないかい？つてね、暫くのお別れだ」

この日、物語の英雄に憧れ冒険者になり、そして英雄になった少年の一つの物語が幕を閉じた。

彼の葬式には、迷宮都市オラリオに居る神々、冒険者、そして、彼を慕っていたファミリアの仲間たちや街の住民たちまで訪れた。

その中には、彼の主神であるヘステイアと犬猿の仲であったロキヤかつては、彼が死んだら魂を追いかけると言っていたフレイヤの姿まであったという。

「あの子は本当に逝ってしまったのね、ヘステイア」

「フレイヤ、君にベル君を追わせやしないよ」

「分かっているわ、かつての私ならともかく今の私にその気はないわ」
「あの色ボケ女神がずいぶんおとなしなったなー、そう思わんかドチビ」

「ロキ、君もベル君を見送りに来てくれていたのか」

「まあ、あの少年にはうちの団員も色々世話になったからなー」

「そうか、ありがとうロキ」

「ドチビがうちに礼を言うなんて気持ち悪くて寒気するわ、それにしても最初はドチビの子の癖に生意気なーっと思っただけだった少年がここまで上り詰めるとはなー、ホンマに惜しい子を無くした」

「ロキ、ヘステイア、私はもう行くわね」

「ああ、フレイヤもベル君の見送りありがとう」

「うちもそろそろ帰るわ」

彼の葬式が終わり、ロキとフレイヤも帰り、ヘステイアは一人呟いた。

「またね、ベル君、また僕達が出会うその日まで」

ベルは目が覚めると目の前には空を突き抜けるほどの高さを誇るバベルがあつた。

(そんな、僕は確かに死んだはず、それにここは)

ベルは周りを見渡していると、そこで声をかけられた。

「ベル君? どうしたの? こんなところで、これからダンジョン?」

ベルが声をした方に顔を向けると自分の目を疑った、そこにはかつて、ベルのアドバイザーをしていたエイナ・チュールがそこに居た。

「……エイナさん」

「うん……そうだけど、どうしたのそんなに驚いた顔して」

「えつと……なんか若返りました?」

「ほほうー、私はまだ19だぞー！ほらほら、あやまれー!!」

ベルがそんなことを言うとエイナは、ベルの頭を胸の上で抱きしめながらそう言った。

(まてまてまてー！19!?!エイナさんが!!)

ベルはエイナの年齢を聞き、もう一度周りを見渡す。

(確かに、僕の知ってるオラリオと少し違う。正確には僕が冒険者になったばかりの頃のオラリオだ。)

「エイナさん、ごめんなさい！本当にエイナさんって19歳ですか？」

「むうー、そんなに私って老けて見えるのかな？」

目に見えるように落ち込むエイナにベルは少し慌てて訂正する。

「い、いえ！違うんです！エイナさんの雰囲気は大人っぽく見えたので！」

「・・・まあ、そう言うことにしといてあげる」

エイナは少し顔を赤くして納得してくれたようだ。

(エイナさんが本当に19歳なのはわかった。と言うことは、ここは過去のオラリオ、時間が戻った!?)

「それはそうと、ベル君！君はまだ冒険者になって1週間しか経っていないだから深くまでダンジョンに潜っちゃダメだよ！」

(冒険者になって1週間？確かアイズさんに5階層で助けられたのもそれぐらいの時だったよな)

「あのエイナさん？僕ってミノタウロスに追いかけて血まみれでギルドまで走ってきましたよね？」

「・・・ベル君、君はいつたい何階層まで降りるつもりなの？上層にミノタウロスなんて居るわけじゃないでしょ。というかそんな不吉なこと言っていると本当になるよ」

(エイナさんの反応からしてまだアイズさんとはあつて居ない)

「ですよー！冗談ですよ！」

「・・・なんか、今日のベル君、へん」

「ハハハッ・・・じゃ僕はもう行くのでエイナさん！サヨウナラー!!」

ベルは走ってその場から逃げ出した。

(ここが過去のオラリオであることは分かった。なら一旦、神様に会

いに行こう。神様なら何か知ってるかもしれないし）
こうしてベルは主神のもとに向かうのであった。

これは、物語の英雄に憧れた少年が英雄を目指す物語では無い
これは、一人の英雄が少年に戻りもう一度出会いを求める物語

第1話：女神との再開

エイナさんと別れた僕は、主神であるヘステイア様に会うために旧ホームである教会に来ていた。

「神様ー居ますか？ただいま戻りました」

「おつかえりー！ベル君!!今日はずいぶんお早いおかえりだね!!」

僕が教会の扉を開けるとそこには、今まで何度も共に笑い共に歩んできた、主神の笑顔があつた。

僕はあまりの懐しさと再び自分の敬愛する主神に会えたことによる嬉しさで頬に涙が伝う。

「おいおいーどうしたんだい？ベル君！どこか怪我をしたのかい??痛いところはありますか?」

いきなり、泣き出した僕を心配して神様が僕に駆け寄り、心配そうに声をかける。

「いえ、怪我はしてませんよ。痛いところもありません。ただ神様の顔がまた見れた事がすごく嬉しくて」

「んな!?べ、べ、ベル君、ついに、ついに僕と君は相思相愛になったんだね!!!」

「ち、ち、違いますよー！いや、違わないですけどー！神様は神様と言うか、なんと言うか!」

慌てる僕を見て神様は、にやりと笑い僕に声をかける。

「照れなくても良いじゃないかベル君、さあさあ中に入って僕達の愛を育もうじゃないか!」

神様はそう言うのと僕の腕に自分の腕を絡ませて、ホームの中に引張って行くのだった。

「神様！違いますってばー！ー!!」

ギルド本部

そこには、オラリオ創世に携わった大神ウラノスとフードを被った男が居た。

「ウラノス、数時間ほど前に下界ではあり得ないほどのアルカナムが観測された」

「ああ、こちらでも観測している。フェルズ、異端児達に異常は無いか？」

「彼らには、何も問題は起きていないよ。だが、これはいったいどう言うことだこれほどのアルカナムを使えば天界への送還は免れないはずだ。」

「確かにそうだ、だが今回にしろ8年前に起きた時も神が天界に送還された形跡はない。」

「そういえば、8年前にも同じことがあったね。いったい何が起きているんだ。」

「こちらでヘルメスを使い調べさせる。フェルズ、お前は異端児達に異常が出たらすぐに報告しろ。」

「分かった。あれほどのアルカナムだ他の神も気付いているだろう。」

ロキファミアリアホーム黄昏の館

そこには、ロキファミアリア主神のロキとオラリオ随一のパルウムの勇者が居た。

「フィン、団員達を使って天界に送還された神が居らんか調べさせえ」

「それは、先程のアルカナムと関係があるのかい？」

「ああ、そうや、8年前と同じや」

「なるほど、どうりで先程から親指が疼く訳だ。だが8年前と同じと言うことはまた、彼女と同じような人間が訪れたと言うことかな」

「さあな、どちらにせよ、オモロイことになりそうや」

バベル最上階

そこには、ロキファミアリアと肩を並べるファミアリアの主神フレイヤとオラリオ最強の冒険者「猛者」オツタルが居た。

「フレイヤ様、先程の力は8年前と同じ・・・」

「あら、貴方も気付いたのオツタル、そうねあの時と同じよ、時代が動

くわ」

かつて英雄と呼ばれたベル・クラネルの預かり知らぬ所で時代は正史とは違う方向に少しづつ帆を進めるのであった。